

「構造専門書の収集癖」

水野 隆介



写真1 事務所の本棚最上段



写真2 『趣味の構造力学』巻頭対談

私にとって馴染みのある構造の専門書といえば、恩師平野道勝先生らによる『鉄骨構造（1978初版）』である。基本的な内容を再確認する際に今でも手を伸ばすことがある。表紙を修復した学生時代からのものと新たに購入したもの2冊が本棚にある。その他、田中先生著『骨組の塑性力学』、益田・室田先生著『工業塑性力学』、ティモシェンコ先生著『ELEMENTS OF STRENGTH OF MATERIALS』など、研究やゼミの輪読で使用した図書には特に愛着を感じる。

独立開業した2004年あたりから、業務で必要となる規基準の購入と並行して、戦後の鋼構造分野を代表する著名な先生方の書籍を集め始めた（写真1）。関東の先生、関西の先生、同じ分野でも記載内容が少しずつ異なり面白い。また、PCが身近でなかった時代の挿絵はかえって表現的を射て秀逸なものが多いと感じる。藤本盛久先生による編著『鉄骨の構造設計（1972初版）』は分厚く、680頁もある。平野先生を含む東工大を中心とした著名な先生方が各章の執

筆を担当されている。設計実務、特に鉄骨系の耐震診断で深掘りする際に手に取ることがある。

加藤勉先生による編著『鉄骨構造の耐震設計（1982初版）』は、東大を中心とした著名な先生方が各章の執筆を担当されている。保有水平耐力の記述内容に前年の新耐震設計法施行の幕開けの時代が感じとれる。

加藤先生がご健在であった約10年前、某鉄骨建材メーカーの研究開発のお手伝いをご縁に、東陽町の熔接研究所に通い詰めた時期があった。その際に2冊戴いた。『単一材の座屈（1952初版）』は、戦後復興期に書かれた加藤先生の学位論文の内容でもある。私には難解な数学の論文に見えてしまうが、座屈耐力を示す手描きの3次元グラフが美しい。当時書き終えられた「ガリレオ・ガリレイの『二つの新科学対話』静力学について（2007初版）』は、材料力学の歴史を知る読み物として面白い。藤本・二見先生による『趣味の構造力学（1983）』は昔、平野研の本棚にあったが、私もほしくなり購入した。内容は戦前から戦中までの『建築世

界』に掲載された構造力学の懸賞付き問題をまとめたものであり、梅村先生はじめ当時の若き優秀な建築学生が模範解答を競い出題者の先生方が講評する、といった流れを記録したものだ。ユニークな力学問題群も面白いが、出版前の武藤、二見、梅村、藤本、青山、平野先生らによる巻頭対談も面白い（写真2）。

コロナ禍で読書の時間が増えてきた。この機会にこれら専門書も丁寧に読み返してみたい。

本執筆を終える頃、恩師平野道勝先生の訃報をOBより受けた。『建築雑誌』2020年8月号の逝去者欄にもあるが、多くのOB同様に驚いている。私を構造の世界に導いていただき、卒業後も何かとお世話になった平野先生に感謝の意を表すると共に、心よりご冥福をお祈りします。

（次回は早稲倉 章悟氏）

（みずの・りゅうすけ）

1967年生まれ 三重県出身 東京理科大学大学院修士課程修了（平野研究室） 2004年よりエム・イー・エム代表取締役一級建築士 構造設計一級建築士 JSCA建築構造士 趣味はギター

